

マーケット概況（2020年1月）

1月の債券相場は、中東情勢の緊迫化から10年356回債の利回りは-0.040%に低下して始まったものの、8日にイランが米国との更なる軍事衝突を望まない姿勢を表明したことからリスクオフを巻き戻す展開となった。14日には米国が中国の為替操作国認定を解除したこと等から円相場は一時約8カ月ぶりに1ドル=110円台の円安水準となり、債券先物3月限は151円76銭まで下落し、10年357回債の利回りは0.010%まで上昇した。しかし、月央にかけては中国武漢で発生した新型コロナウイルスの感染拡大懸念や21日にIMFが世界経済成長率見通しを下方修正したことを受け、債券相場は堅調に推移した。その後は、28日の40年債入札を無難に通過したことでイールドカーブのブルフラット化が進行し、30日には超長期ゾーンの利回りが2019年11月以来の水準まで低下した。月末にかけては、新型コロナウイルスの更なる感染拡大から債券相場は騰勢を強め、31日に債券先物3月限は一時152円88銭まで上昇し、10年357回債の利回りは-0.070%まで低下した。なお、同日17時に発表された2月の国債買入オペ運営方針で、超長期ゾーンの買入回数が3回から2回に減らされたことからイールドカーブはスティープ化し、10年357回債の利回りは-0.065%で今月の取引を終えた。

<短国市場>

3M金利は概ね-0.1%台前半で推移し、月末にかけて低下した。7日の3M879回債入札の最高落札利回りは-0.09%台と前回債から横ばいの水準でスタートし、その後の3M入札では-0.10%~-0.11%台が続いた。国庫短期証券買入オペは、前月までの1,000億円/回ペースから大幅に増額され、15日のオペでは1兆円がオファーされた。その後も月を通して買入ペースは高水準で維持され、需給の改善に繋がった。月末にかけては、投資家需要の高まりから31日の3M885回債入札では-0.12%台に低下し、-0.130%で今月の取引を終えた。1Y金利は16日の882回債入札では-0.12%台でスタートしたが、その後は中期債の金利低下とともに買いが強まり-0.180%に低下した。

<一般債市場>

新発10年政保債のスプレッドは国債カーブ+7.5bpと前月比0.5bp縮小し、好需給を背景に2ヵ月連続してタイト化した。一方、10年地方債は同+14.0bpと前月の水準を維持した。中旬以降に国債金利が低下基調となるなか既発債に調整売りは出ていたが、底堅い投資需要により需給の緩みは見られなかった。社債は、東日本高速道路のソーシャルボンドを含む高速道路債が発行額を押し上げ、8,070億円と1月としては2011年以来の高水準となった。ユーティリティ銘柄では初のサステナビリティボンドとなる東日本旅客鉄道債や、発行体初のグリーンボンドとなる東急不動産債、オリックス債などSDGs債が増加し、社債月間発行額に占める比率は2割程度に上昇した。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#357	-0.005(7日)	-0.070(31日)	0.010(14日)	-0.065(31日)
#356	-0.040(6日)	-0.080(31日)	0.005(15日)	-0.070(31日)
#346	-0.100(7日)	-0.170(30日)	-0.075(14日)	-0.160(30日)
#142(5Y)	-0.090(15日)	-0.170(31日)	-0.090(15日)	-0.170(31日)
#171(20Y)	0.300(17日)	0.210(30日)	0.315(17日)	0.245(31日)
#880TDB(6M)	-0.111(9日)	-0.170(31日)	-0.110(9日)	-0.170(31日)
#878-#885TDB(3M)	-0.110(7日)	-0.140(31日)	-0.109(9日)	-0.130(31日)